

風ばめる木々の向こうに細い月が沈み、衣は露に濡れ、清らかな琴の糸が張られる。

暗がりを流れる泉水は花香る小道を縫い、春の星は草堂をそとと包む。

書物を吟味しているうちに蠟燭も細り、刀剣を閲しながら酒杯をおもむろに引き寄せる。

語注

○ 左氏 未詳。 1 風林 風に揺れる樹林。 織月 三日月。 細い月に注目することは、中国では多くはない。

2 衣露 日が暮れ月も沈んで、冷気が増して衣服の上に降りた露。 净琴 琴の樂器や音色を清淨なものとして「净」を冠して言う。 張

琴の絃をぴんと張つて演奏に取りかからうとする。 3 暗水 暗闇を流れる、庭園に引き込まれた水。 5 檢書 書物をめくつて調べる。 6 看剣 刀剣を賞讃する。 引杯長 酒杯をゆっくりと引き寄せる。 7 詩罷 宴に集つた人たちがそれぞれ自作の詩を朗唱し終わる。 吳詠 南方呉の国（江蘇省）の歌謡。宴の余興として歌姫が唱う歌。 8 扁舟 小舟。『史記』貨殖列伝に、范蠡が呉王夫差を破つたあと、「乃ち扁舟に乗りて江湖に浮かばん」。

【詩型・押韻】五言律詩。下平十陽（張・長・忘）と十二唐（堂）の同用。平水韻、下平七陽。

詩解

貴人の宴に陪席した詩。細い月が沈む日暮れ時、饗宴は庭から始まる。闇が深まり、視覚に代わつて、足下を流れる水の音、咲き乱れる花々の香りといった聴覚と嗅覚のみで情景を捉える。天空には春の星々が拡がる。「草堂 春星を帶ぶ」と言つても同じことであるが、「春星 草堂を帶ぶ」と言うことによつて、草堂が星空にやさしく包み込まれてゐる感じが伴う。やがて宴の場は室内へと移動し、主人自慢の書物や剣が披露される。「書」と「剣」は文武の対を成し、主人の「左氏」は文武にすぐれた高い地位の人であることを思わせる。呉の歌を聴いて蘇るのは、南方を遍歴した自由な日々。最後は個人的な感傷を呼び起こして結ばれる。詩全体が清淨で洗練された美感に満ちてゐるが、春の夜の甘やかな情感を繊細にうたうこうした詩は、後になると影を潜め、これも若い時期の作とするにふさわしい。「春夜の宴」といえば、李白の「春夜 桃李の園に宴するの序」が思い起こされるが、李白のそれが宴を時間の推移のなかに置く伝統に連なつてゐるのに対し、杜甫の宴の詩は若年の作ではあつてもすでにそこから脱している。